

# 論 説

## 天明飢饉の考察

### ——寺院過去帳による実証——

菊 地 万 雄

#### 一、天明飢饉の跡

米価変動 大坂は奥州より遠隔の地であったが、近世期における国内経済の中心地として、当時の米価決定に大きな役割と影響力をもっていた。そこで、当時日本全体の米価変動の代表地域において、近世末の凶作がどうひびいたかをみるために大坂をとりあげ、その米価の変動をみた<sup>1)</sup>。そこに幕末三大飢饉の中でも天明・天保のそれが顕著で、大坂市場にまで強い影響をおよぼしたと全国的な大飢饉であったことをみることが出来る。さらに、当時の東北における米価の高騰を、天明の津軽・天保の秋田と中央市場におけるそれとに比較検討を加えると、<sup>2)</sup>当時の弘前・秋田領内における米価がいかに全国的視野からは極端であったかがわかる。例を『天明三癸卯歳大凶作天明四辰歳飢喝聞書』<sup>3)</sup>によって八戸における米相場をみると、

「……諸相場月々日々高値ニ依て記す……」

に記載の通り、年内における較差が大きく、いかに急激な高騰をしたかがうなずけると共に飢饉の惨状も充分に思われる。なお、仙台藩の凶荒による当時の損毛高を記録した『東藩史稿』<sup>4)</sup>も、天明・天保の損毛の異常さを物語っている。これらのことは、大都市中央

市場とちがって東北の凶作被害はきわめて大きかったことを裏づけている。

一揆騒動 米価の高騰は、世上不安をまねき、騒動や打ち壊しまたは一揆との関連も考えられるので、その蜂起回数分布を全国的にながめた<sup>5)</sup>。比較検討にあたっては、動員数・期間・範囲などの内容や規模の吟味・考慮も必要であるが、単に数のみをとらえてみても、天明二年一八回、三年四七回、四年二〇回、五年一八回、六年三四回、七年五〇回、天保三年一九回、四年七三回、七年九九回、八年五五回、九年一八回と天保は七・八年に集中して蜂起の頻度が高く、天明と天保の両者では、前者よりも後者に飢饉の影響が大きいようにみられる。

天明三・四年、天保七・八年について国別に発件数をドットすると、天明飢饉は明瞭に東日本の東北部に集中し、天保飢饉は天明飢饉に比較して全国的の分布がみられ、その影響が天明よりも天保がはるかに広範かつ多大であったものとみることが出来る。

人口増減 徳川時代の全国人口を正確につかむことは困難であるが、『吹塵録』ならびに先学の業績によって、<sup>6)</sup>享保六年の人口を一〇〇とした場合の天明・天保の国別増減分布をみると、西南日本・裏日本で増、東北日本・表日本で減と、日本列島をつつむ自然環境から推察できる常識的な線がでていいる。これを、地域を細分しながら、地方別・国別の飢饉の影響という点でみると、

天明後の減少 近畿・東海・関東・東北、  
天保後の減少 近畿・東北・東山・北陸・山陽・山陰、  
天明増天保増 土佐、

天明滅天保減 陸奥・出羽・安房・三河

と、天明・天保ともに例外なく冷害凶作の影響をまともうけてい  
るのは東北日本であることが明白である。これに反して西南日本は、  
天明・天保とも増減の地域差はあるが概して増加傾向が顕著で、西  
南へ進む程凶作に關係がうすいことを示している。

金石文 岩手の『郷土読本』に「本県中部以北の村々の辻や寺院な  
どに、有縁無縁両塔・餓死供養などと刻んだ石碑が間々目につく。  
これは昔凶歳に食物なくて餓死した者の冥福を祈る為に立てられた  
ものであって、……」の飢饉回顧冒頭文の一節があるが、森嘉兵  
衛氏も「岩手・青森県地方を旅行した人々は……餓死人供養塔  
の多いのに驚かされるだろう……」と述べているように、本州東  
北部にはこれに類した三界萬靈塔・供養塔・念仏塔と記された数多  
くの碑がある。

このような金石文は、宮城県内については三原良吉氏の克明な調  
査があるが、<sup>9)</sup>地県では路傍の石として顧みられず、土地の人にさえ  
知られずにひっそりと残り残されているというのが現状である。し  
かし、青森県弘前市小沢久渡寺にある卯辰五輪供養塔や、<sup>10)</sup>十和田  
市板沢の郵便局近くの道端にある卯辰両年餓死精霊等の供養碑<sup>11)</sup>など  
は、久渡寺住職や十和田市教育委員会の鈴木十志雄氏など心ある  
人々によって見守られているものの好例といえよう。もちろん、全  
部が忘れ去られているのではなく、<sup>12)</sup>

青森県八戸市対泉院 飢死萬靈供養石碑  
岩手県盛岡市東頭寺 四百九十男女餓死亡霊等<sup>13)</sup>

宮城県仙台市桃源院 餓死供養塔五輪塔<sup>15)</sup>  
宮城県仙台市桃源院 叢塚<sup>15)</sup>  
などの如く、早くから門前や境内に安置されて庶民のたむける香の  
絶えないものもあるし、

青森県八戸市清水寺 卯辰供養塔 (高橋哲仙)  
青森県三戸郡館村 餓死供養塔 (青森県叢書)  
岩手県岩手郡滝沢村 飢饉供養塔 (青木大輔)  
岩手県紫波郡矢幡町 百万遍供養塔卯辰餓死供養塔 (青木大輔)  
岩手県下閉伊郡大槌町 癸卯飢渴亡者供養塔 (大槌町史)  
岩手県二戸市聖福院 餓死供養塔 (沢内武四)  
岩手県二戸市聖福院 餓死供養塔 (沢内武四)  
岩手県岩手郡雫石町晴山 餓死供養 (谷藤孝一)  
岩手県岩手郡雫石町林 有無両縁塔 (谷藤孝一)  
岩手県宮古市瑞雲寺 有無縁萬靈等 (菊池万雄)  
岩手県盛岡市報恩寺 供養碑 (青木大輔)  
岩手県陸前高田市 万人施宿塔 (青木大輔)  
などのように、研究者の対象になったり、篤志家に記録紹介され  
たものもある。<sup>16)</sup>  
こうした金石の分布をもっと広範な地域にもとめることによって  
も、災害頻度的一端を推察することもできよう。しかし、現状では  
金石文の刻まれた塔碑が、摩滅・損耗・移動・転用などもあって、  
その有無さえも充分判明しておらず、当該県市町村による調査は精  
粗もあって、画一的に比較できる状態ではなく、今後の調査研究に

まっところが大きい。

古文獻 金石文残存のほかに、飢饉の惨状を記録した地方文書や紀行文・見聞記がある。それらを巨視的・全国的視野で分布状態をみると、表Ⅰの通りである。これをみると、天明飢饉関係の記録は、極端に津軽に集中し、八戸・盛岡・仙台・相馬・磐城と東北日本でも太平洋岸に沿って南下しているが、天保の場合は、天明に比して同じ東北日本でも、秋田・山形・酒田・新潟と割合分散して分布がみられ、さらに、わずかながらも、近江・伊勢・京都・石見・伊予・筑紫と西南日本まで広がっている状態をみる事ができる。

こうした点からも、文書収録などによる知名度も、天明は東北日本の特に太平洋岸に強烈で、天保は天明のそれに比してかなり広範で全国的であったとみる事ができる。

## 二、記録にみられる天明飢饉

表Ⅰの文書は、全国的巨視的立場で収録されたもので、前節ではその分布のみを問題にしたが、ここではそのほかに、地元に残る文書を加えて内容を検討し、天明飢饉の状態を考察してみたい。

記録は県史に収録引用されたもののみでも南部・津軽藩史料として、<sup>17)</sup>『天明卯辰築』『飢饉凌鑑』『天明四辰五月日記』『天明日記』『天明凶歳録』『天明凶歳日記』『天明荒録』(天明)、『天保雑話』『八戸年代雑記』『天保凶荒録抄』(天保)、伊達藩史料としての『仙台飢饉日記』『天明三四歳飢饉覚書』『天明飢饉録』『卯辰凶歳世話物語』(天明)、『東藩史稿』『天保飢饉録』『近江日野資料』『天保荒世記』『凶歳留』『時還読我書』(天保)などがあり、量的にも前

述同様、天明は特に北ほど多い。また、天明飢饉の死亡者に ついての先学の業績をみても、本庄栄治郎氏が述べた、中村藩全人口の約一割減少<sup>19)</sup>、高橋梵仙氏の南部藩一割八分・秋田藩一割六分減<sup>20)</sup>、岩手県史から算出できる南部藩の一割九分減、関山直太郎氏の津軽藩における「天明四年二月調の領内昨年 以来の餓死者六四〇〇〇余人<sup>22)</sup>」や、小鹿島果氏・門前弘多氏の「……他国ニ赴キシモノ一万余人 道路ニ斃死住所知レサルモノ二万余人 弘前非人小屋ニ斃レタルモノ八〇〇余人<sup>23)</sup> ……」など対象が東北部に集中し、北ほど甚しい惨状に注意 したい。

古記録にみられる天明飢饉における東北の地位は、『農諭』<sup>24)</sup>に記 載の「……近国関東のうちはいまだ大ききんとはいふにいたら ず……奥州等の他国にてはうえ死せしか多くありけり……」、 『孫謀録』<sup>25)</sup>の「……天明三年東方凶 奥羽二州最飢……」、 『餓年要録』<sup>26)</sup>の「……天明三卯年ハ東国一円の大飢饉就中奥羽 二ヶ国甚しく……」、『後見草』<sup>27)</sup>の「出羽陸奥の両国は常は豊饒 の国なりしが 此年(天明四)はそれに引かへて取わけの不熟にて 南部津軽に至りては余所よりは甚しく……」などと、相対的な 眼をむけて、全国的にみれば東北は大変であったとみるのが当時の 一般的傾向であったと考えられる。

奥羽のうちでも津軽において強烈だったと主張したものには、 『天明年度凶歳日記』<sup>28)</sup>の「天明三年是歳諸国飢饉 陸奥津軽特に 甚だしく惨状前代未聞……」、『飢饉通考』<sup>29)</sup>の「……我が津軽

表 I 天明・天保飢饉関係文書

天明飢饉関係			天保飢饉関係		
津軽	天明癸卯年所々騒動留書	(庶民)	津軽	津軽地方凶荒一件	(古今)
"	耳目心通記	(庶民)	"	耳目心通記	(庶民)
"	天明凶歳記	(古今)	八戸	天保四癸巳年凶作日記	(古今)
"	齋觴日記	(古今)	秋田	飢饉懷覚録	(濟史)
"	夢の松風	(一揆)	南部	遠野唐丹寝物語	(一揆)
"	天明年度凶歳・日記	(一揆)	"	飢饉考	(庶民)
"	饑饉通考	(饉志)	"	天保氣候録	(古今)
八戸	天明三癸卯歳・大凶作天明		山形	天保年中已荒子孫伝	(饉志)
	四辰歳・飢飢聞書	(庶民)	酒田	天保非常備組立方論達	(濟史)
"	兎園會集説	(類苑)	仙台	天保飢饉録	(古今)
南部	飢饉考	(庶民)	"	天保耗歳録	(古今)
"	動転愁記	(古今)	磐城	石川那秋田氏凶作の事	(古今)
仙台	扶桑奇跡抄	(饉志)	越後	救荒孫之杖	(饉志)
"	天明卯歳凶歳・世話物語	(古今)	常陸	濟急記聞	(饉志)
"	日本野史	(災異)	下野	農家心得訓	(饉志)
"	古老口碑	(饉志)	"	古老実験	(災異)
相馬	天明救荒録	(庶民)	信濃	補饑新書	(濟史)
会津	孫謀録	(庶民)	"	天保飢饉略記	(災害)
磐城	福島県救荒誌	(古今)	"	饑年要録	(災害)
下野	農喻	(大典)	武蔵	武江年表	(武江)
"	農家心得訓	(饉志)	"	飢饉嘶聞書類集	(嘶)
武蔵	武江年表	(武江)	"	天保飢饉奥州武蔵聞書	(濟史)
"	下駄屋甚兵衛書上	(大典)	甲斐	郡内騒動	(一揆)
"	天明大政録	(大典)	相撲	報徳記	(類苑)
"	凶年記信	(饉志)	近江	天保義民録	(一揆)
"	後見草	(辞典)	伊勢	救荒車宣	(大典)
"	春濃鶯	(濟史)	京都	荒歳流民救恤図	(饉志)
下総	安食旱魃物語	(濟史)	伊予	御世の恵	(濟史)
大阪	貨幣参考	(災異)	"	松之一葉	(大典)
石見	騒動記	(饉志)	"	赤子問答	(大典)
隠岐	凶年歳土穂	(饉志)	"	救荒瑣論	(大典)
			諸国	(奥州・常陸・出羽・石州・駿州・三河・日向・遠州・越前・近江・下総・筑紫・伊勢・濃州・信州・丹後)	
				風損便覧	(災害)

(注)

庶民 日本庶民生活史料集成(森・谷川)  
 古今 古今凶作飢饉志(門前弘多)  
 一揆 徳川時代百姓一揆叢談(小野武夫)  
 饉志 日本震災凶饉攷(権堂成郷)  
 類苑 古事類苑(刊行会)  
 災異 日本災異志(小鹿島果)  
 大典 日本経済大典(滝本誠一)  
 武江 武江年表  
 辞典 世界歴史辞典(下中弥三郎)  
 濟史 近世地方経済史料(小野武夫)

災害 近世気象災害志(荒川秀俊)  
 嘶 飢饉嘶聞書類集(高梨輝憲)

五郡は皆茫茫たる水田にして……外に産するの品なく唯米を輸出して百貨と交換して以て用を弁ずるのみ……偶凶荒に遭へば凍餓に死する者過半に至りしと古より往々有り……、『天明癸卯年所々騒動留書』<sup>30)</sup>などの記録がある。山口弥一郎氏が『天明度に於ける津軽大秋の死絶と再興』<sup>31)</sup>の中で「減少率七割三分五厘……死絶明屋敷と記入したのもある……」と述べているのは、津軽における天明飢饉の惨状を物語る好例といえよう。

津軽に対する糠部については『孫謀録』の「……南部は津軽続にて同様に候へとも山郷多候故津軽よりも不宜……」「……南部領第一の凶作艱難の次第は八戸に相聞候……」、『天明卯辰築』の「……此度の飢渴は僅に卯の九月より辰の五月迄 凡一〇ヶ月に不満 餓死疫癘にて死亡する処半国余に及へり……」

『十三朝紀聞』<sup>34)</sup>の「天明三年八月一三日陸奥……東国飢南部尤甚餓死者多……」などは、津軽地方よりも東北隅、八戸地方に飢饉の焦点というべきところがしばらくられ、米価の短期間の急騰を記録した『天明三癸卯歳大凶作天明四辰歳飢喝聞書』<sup>35)</sup>にみられる。「諸相場月々日々高値依て記す 八戸相場 一、卯三月米二斗一升……七月一斗五升……八月二八日八升……一〇月二八日五升二・三合……十一月二八日四升二・三合 翌辰年正月三升八合……」は、食料需給のアンバランスによる急騰を意味し、飢餓の急激な進行を示すものである。

また、天明飢饉直後にこの地方を訪れた高山彦九郎も『北行

日記』<sup>36)</sup>に「南部領中八ノ戸わけて飢喝す……」と記録して、八戸地方の飢餓を強調している。

青森県八戸市対泉院門前にある『飢死萬霊供養石碑』は、当地方における天明飢饉の惨状を物語るものといわれ、裏面記載文中の後世故意に抹消した箇所は、人肉食に関係があったところといわれているが、これを裏づける記録は多々ある。

「……附近の老人死候而葬候を掘返し喰候見届……」(天明卯辰築)<sup>38)</sup>

「……出崎村の源次郎と申者の女房など……男子の餓死致し候を女兩人にて四日間にたべ申候……子供の泣声致し候につき隣家より参り見れば まだ生きたる子供の股へ食ひつき居り候由……豊田村の支村の……長三郎と申者の悴……母と妹餓死致し候に二〇日ばかり間右母と妹を食ひ候て骨をば薪の代りに焚き……」

(天明癸卯年所々騒動留書)<sup>39)</sup>

「……妻我が子に食を与へず……子は終に死せり 則母其子の肉をそぎ食しけれ共……」(天明救荒録)<sup>40)</sup>

「……是も五戸の辺……夫婦に男女の子有る者父親餓死せり……末子の女子……我々明日にも餓死すべき身……母や兄の言葉を用ひず遂に父親の死骸を切刻み煮焼て食ひ尽しける……」

(飢饉考)<sup>41)</sup>

「……八戸神明社の内に大男餓死人有之候を腕腰の辺切候て料理致居候を見……母餓死候を娘家の内に罝置食物に致し居候……」

「鳥沢村……しうとめ飯料五ノ七升ばかり有之候を嫁にかくし不宛……嫁もせん方なく子をころし喰申候……」(天明三癸卯歳

大凶作天四辰歳飢喝聞書<sup>42)</sup>

「……食ふべきものの限り食ひたれども、後には尽果て、先に死たる屍を切取ては食ひし由 或は小児の首を切……脳味噌を引出し……」(後見草)<sup>43)</sup>

「……二本木村の某は其娘の死したるを喰ひ或は祖母の死肉を喰へしと云へり……」(餓饑通考)<sup>44)</sup>

「……誰とは知れぬ髪乱したる女の死たる上に座し二・三歳の子どもの真白なる小腕を右の手に持喰ふ……」(飢歳凌鑑)<sup>45)</sup>

「在々次第に食い芳れて犬猫鶏様の物を喰仕過 其後は馬を殺して食事とし……馬もくひ果し詮方なき余りにや死したる人の肉を食するもの存々所々に多……」(天明凶歳録)<sup>46)</sup>

「……牛馬は勿論人肉にも及しとそ……」(原始謾筆風土年表)<sup>47)</sup>

「……遂ニ馬モ食ヒ尽キテ詮方ナク死シタル人ノ肉ヲ食ス……多クハ女子ノ肉人ノ食トナレリ……」(八戸聞見録)<sup>48)</sup>

「古来稀成義は非人共犬猫牛馬を喰候は世に不思議に存候所死掛り候人之肉を切はなし格別うまき味なるよし申候言語同断……」

(兎園会集説)<sup>49)</sup>

「……われらは馬をくらひ人をくひてからき命をたすかりつれと……」(菅江真澄遊覧記)<sup>50)</sup>

「……飢年に大野村中庄屋と酒造家と二軒のみ人を食はず其余は皆ナ人を食ろふ……」

「其頃諸村を廻る事ありて見るに塚墓をは井戸の如く掘り起し屍を食ひたる跡恐ろしく……」

「……飢人共強きは弱きを殺して食ひ……」

「……乞食小児の手を噛みて居るを見つると……」(北行日記)<sup>51)</sup>

と、人肉食の記録が多く、当時の世上がいかに荒廢して最悪の条件下にあったかを物語るものといえよう。なお、岩手県九戸郡軽米の酒商洲沢家文書『萬覚牒』<sup>52)</sup>には、

「友ヲ喰申候牛馬犬猫鶏杯之類ハ大上品之様心得喰申候 此下川原杯ニハ死人石分茂多御座候得者人喰共日々夜々ニ参股ヲ切腹ヲ割五藏ヲ取出頭ヲ割而のふみそを取てつばけニ入持参致候肉ヲ者直ニ鍋ニテ煮上ケ……」

と当時の情景を伝えているが、せいぜい惨というよりほかはない。

人肉に関する最初の記録は、『日本書記』<sup>53)</sup>の「欽明天皇二八年是歳郡国大水饑人或相食……」にみられ、飢饉の惨状表現の常であり実際にあり得べからざることとの評もあるが、<sup>54)</sup>一方では、飢餓に追い詰められた最後の手段に考えられないことではないとする見方もある。<sup>55)</sup>

前者は、宗教的・社会的・人道的に問題として扱うべきではなく、ふれてほしくないこととして評しているものとも思われ、後者は、それにしても事態の深刻さはどうして表現せずにはおられないという立場と考えられる。いずれにしても、ここでは、記録の是非は論をまたないが、ことの真偽を別にして、記録の有無そのものの分布を問題にし、その背景となった当時の環境を思うのみである。

『北行日記』<sup>56)</sup>には「仙北の小野村……八年前飢饉の年盜賊多く……」と秋田の仙北郡では盜賊の横行した記録はあっても人肉に関する記録はなく、岩手でも、「……田頭宿寺

田より 此辺も餓死多つけれども牛馬を食ふに至らず……」  
と記して、奥羽の東・西について、人肉記録の南限を示し、  
一線を画することができる点に注目したい。

### 三、寺院過去帳よりみた天明飢饉

① 寺院過去帳抄 過去帳は、本来死亡者の冥福を祈る  
目的でしたため命日と仏名のみで足りるわけで、特記事項は  
むしろ異例のことであるが、天明飢饉に関連したものをのみを  
あげると、「九世代天明餓死ヨリ寛政マテ……」（長福寺<sup>57</sup>）、  
「天明三卯年大飢饉ニテ一束ニ付米一升余宛……」（長善  
寺<sup>58</sup>）、「天明三癸卯歳此年大不作大凶年大ク他国乞食出数不  
知……」（□□寺<sup>59</sup>）、「天明四年七月朔日 漢村利三郎船  
ノ者餓死人数 助五郎・与重郎・伊之助・長松・浪助・重太  
郎・松兵衛……」（対泉院<sup>60</sup>）と、一般に餓死・凶作は禁句  
とされていた時に、あえてそれを記録したもので、「……  
四〇〇人余他国他所ニテ不知モ有之……」（□□寺<sup>59</sup>）、  
「救人御助粥被仰付右小屋ニ而死去之人数……都合二郡  
二九人所々四一人 合七〇人 男五一人 女一九人 右之通  
候 天明四年辰七月」（松庵寺<sup>61</sup>）などは、食を求めて当ても  
なく右往左往した状態を物語っているものである。  
もっとも悲惨なものに「天明三癸卯此年大凶年三月分九月  
迄天東北雨風ニ而喰馬喰人程之儀也」（対泉院<sup>60</sup>）の記録もあ  
る。

② 年平均死亡者数 記録は記録者個人の意志によって

なされるものであるからその人の主観の介入は当然である。  
したがってそうした記録のみによって地域間の比較検討は決  
して充分とはいえない。その点、人間の死という厳粛な事実  
による対比は、考察に相対性と客観性を可能にする利点があ  
る。

対象地域は山陰・北陸の一部を含めた主として東北日本である。  
地域別・寺院別に明和八年から明治三年までの一〇〇年間から得た  
年平均死者数をもとに、次の諸式による値を算出して比較検討を加  
えた。

M……年平均死亡者数（明和八ノ明治三）

T……天明飢饉（二ノ六年）年平均死亡者数

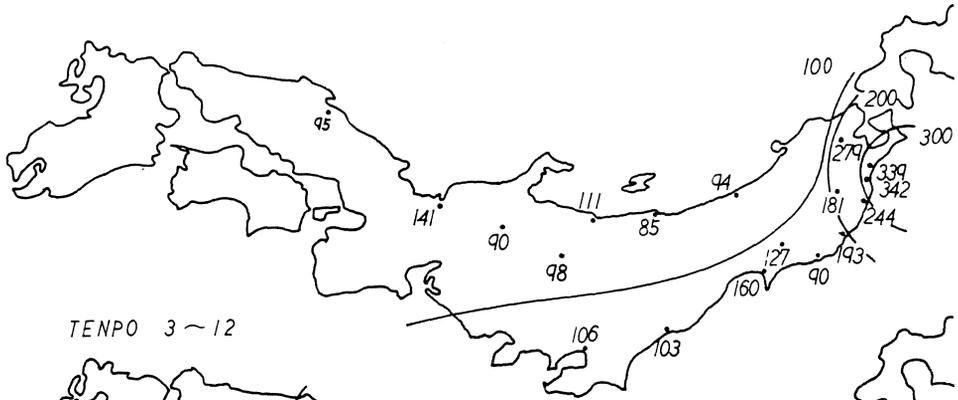
m……月別死亡者数

$T/M \times 100$  t……天明飢饉の被害率

$m/M \times 100$  n……月別被害率

図1は、tおよび、tと同時に求めた天保飢饉の被害率とを  
ドットしたもので、前述の米価変動・一揆蜂起・人口推移・記録な  
どによって推察した東北日本における東北部の被害高率が、なお明  
瞭になり、地域的にも焦点をしぼることのできるものである。天明  
飢饉年の米価高騰を嘆いて諸国の米価を記した『農諭<sup>62</sup>』によつて  
米価分布を画いたり、『孫謀録<sup>63</sup>』による米価分布でもそうである  
が、過去帳にみる、天明飢饉年の死亡率分布は、奥羽山脈によつて  
明確に東と西とに大別される点が指摘できる。これに対して天保の  
それは、垂直高度分布にしたがって中央高地にのび、ケッペン<sup>64</sup>の気  
候区分Dfaと類似の線を画く、標準的形態をみることができる。

TENMEI 2~6



TENPO 3~12

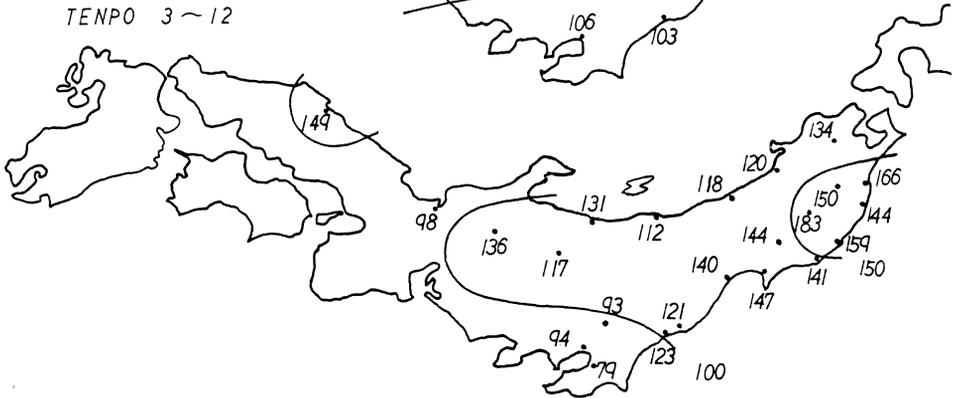


図1 飢饉年における死亡率分布

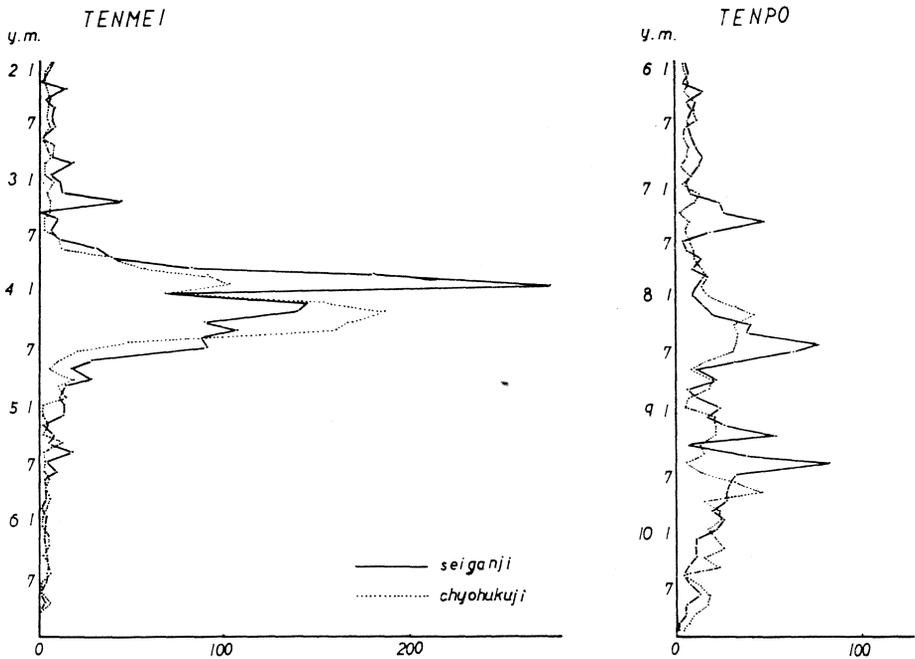


図2 飢饉年の月別死亡者推移

③月別死亡者数 八戸付近の詳察のため、八戸市対泉院・弘前市泉光院・上北郡青岩寺・久慈市長福寺によって、天明・天保のmとnとをみると(図2)、天明の死亡者は、極端に三年末から四年初めに集中して、飢餓の惨状を裏づけるような鋭いピークがみられるのに対して、天保のそれは、天明に比して中小ピークの繰り返し長期にわたっているという特色がある。<sup>64)</sup>

天保の飢饉は俗に「七年間の不作」といわれた如く、長期間連続凶年の特色がよくあらわれて、「七年飢渴<sup>65)</sup>」といわれたり、「……………其余七ケ年は皆共に凶変……………」(天保凶荒録抄<sup>66)</sup>)、「……………一一庚子春迄八ケ年間飢饉凶作打続餓死致者数多……………」(実相寺過去帳<sup>67)</sup>)、「自天保四年七箇年之中飢饉而……………」(長福寺過去帳<sup>68)</sup>)、などにみられる如く、長期間の凶年は衆目のみるところであった。

凶作飢饉が一カ年で被害を甚大にすることがまれで、数カ年の連続・断続が普通である。この点を強調しながら関山直太郎氏は、<sup>69)</sup>「天明及び天保には凶作連年に及び……………」、「天明の飢饉は連続数年にわたる凶荒結果……………」、「天明の凶作及飢饉は時間的にも永く……………」として、寺院過去帳でみる限りは、天明には三年一〇月から翌年六月までの短期間に死亡者が集中し、地域的にも陸奥糠辺地区に強烈であったことが指摘できる。すなわち、南の久慈市長福寺と北の七戸町青岩寺では、北の青岩寺檀家地域にひどく、東の八戸市対泉院と西の弘前市泉光院では、東の対泉院檀家地域で惨状を呈してこれを立証している。

月別死亡者数の画くカーブを季節的にみると、凶作年の年末一〜二月から上昇しはじめて、翌年春から夏の食料在庫欠乏入手困難という時季にピークをつくる、飢饉年独特の死亡曲線を描いている。日本における総死亡率の月別変化は、いずれの場合でも二月から六〜七月、春から夏にかけて下降線をたどるとされているのに対して、ここにもみられる月別死亡者数の変化は、例外なく春から夏にかけて上昇カーブを描いて、平年のそれとは対照的である点を特に注意したい。

#### 追記

この稿は、一九七五年春の歴史地理学会大会(京都大学)において発表したものに加筆したものである。過去帳による場合の男女別年令別や武士と町人の階層別・都市と農村などのほか、凶作飢饉の背景となった当時の自然環境や人文環境にも言及すべきであるが、それらについては稿を改めることにしたい。

#### ◎注

- 1) 下中弥三郎(一九五五) 世界歴史辞典 二二 P・三八三〜
  - 2) 小野武夫(一九六九) 近世地方経済史料 八 P・三五七〜
- 森 嘉兵衛・谷川健一(一九七〇) 日本庶民生活史料集成  
七 P・三二九ノ所収 高橋正作著「飢饉懐覚録」  
天保四年前後一八年間の米価
- 森 嘉兵衛・谷川健一(一九七〇) 日本庶民生活史料集成  
七 P・三二四ノ所収 添田儀左之門著「耳目心  
通説」享保ノ寛政の米価
- 3) 森 嘉兵衛・谷川健一(一九七〇) 日本庶民生活史料集成

- 7 P・四一五
- 4) 高橋梵仙 (一九六二) 日本人口史の研究 三 P・一五五  
門前弘多 (一九四四) 古今凶作飢饉誌 P・二二四
- 5) 黒正 岩 (一九七一) 百姓一揆の研究 P・二五五、二六二  
黒正 岩 (一九七一) 百姓一揆の研究 続編 P・三三四  
と三三七
- 青木虹二 (一九七二) 百姓一揆総年表 P・一五〇、  
一五六、二三八、二五二
- 下中弥三郎 (一九五五) 世界歴史辞典 二二 P・四三九、  
四五八
- 6) 古事類苑刊行会 (一九二七) P・一〇一 日本国郡沿革考・  
大日本史(食貨三)  
勝部真長・松本三之介・大口勇次郎(一九七四) 勝海舟全集  
六 P・二九七、
- 本庄栄次郎 (一九三〇) 人口及人口問題 P・三七、  
本庄栄次郎 (一九四一) 日本人口史 P・六三  
関山真太郎 (一九四八) 近世日本人口の研究 P・八〇、  
高橋梵仙 (一九七一) 日本人口史研究 一 P・一〇七、  
高橋梵仙 (一九七五) 大日本古来人口考の成立過程と本文  
大東文化大学紀要 一三 P・八四、
- 7) 岩手県教育会 (一九二九) 郷土続本 上 P・九一
- 8) 森 嘉兵衛 (一九三二) 旧南部藩に於ける天明の飢饉 社会  
経済史学 二一
- 9) 宮城県 (一九六二) 宮城県史 二二 P・二四〇、
- 10) 青森県弘前市小沢久渡寺住職談(一九七五・三・一〇・訪問)  
11) 青森県十和田市教育委員会社会教育課 郷土館長 鈴木十志雄  
氏案内(一九七四・八・一訪問)
- 12) 青森県八戸市 対泉院 (一九七五・三・一〇訪問)
- 13) 岩手県盛岡市 東顕寺 天明三卯従十一月二〇日天明四辰三月  
八日迄 四九〇男女亡餓死亡霊等(一九七四・八・  
三・訪問)
- 14) 岩手県花巻市 松庵寺 (一九七四・八・四・訪問)
- 15) 宮城県仙台市 桃源寺 (一九七四・七・二七・訪問)
- 16) 高橋梵仙 (一九六二) 日本人口史之研究 三 P・一五三  
新編青森県叢書刊行会(一九七三) 新編青森県叢書 三 写  
真
- 青木大輔 (一九六七) 寺院過去帳からみた岩手県の飢饉  
写真
- 沢内武四 (一九七四) 岩手県二戸市福岡小学校校長紹介  
(一九七四・九・二四)
- 谷藤孝一 (一九七四) 岩手県岩手郡雫石小学校長紹介  
(一九七四・九・二六)
- 柳田国男 (一九七四) 遠野物語 P・三一
- 17) 新編青森県叢書刊行会(一九七三) 新編青森県叢書 三
- 18) 宮城県 (一九六二) 宮城県史 二二 P・三四九、
- 高橋梵仙 (一九六九) 日本人口史の研究 三 P・一五七
- 19) 本庄栄治郎 (一九四一) 日本人口史 P・一三九
- 20) 高橋梵仙 (一九四一) 日本人口史研究 P・六四一、六四七

- 21) 岩手県 (一九六三) 岩手県史 五 P・六五三
- 22) 関山直太郎 (一九六九) 近世日本の人口構造 P・一六六
- 23) 小鹿島 果 (一九六七) 日本災異志 P・四四
- 24) 門前弘多 (一九四四) 古今凶作飢饉誌 P・一六〇
- 24) 滝本誠一 (一九二五) 日本経済大典 二六 P・五二九
- 25) 森 嘉兵衛・谷川健一 (一九七〇) 日本庶民生活史料集成 七 P・三五七
- 26) 荒川秀俊 (一九六三) 近世気象災害志 P・一一三
- 27) 下中弥三郎 (一九五五) 世界歴史辞典 二二 P・四〇二
- 森 嘉兵衛・谷川健一 (一九七〇) 日本庶民生活史料集成 七 P・七五
- 28) 権藤成郷 (一九三二) 日本震災凶饉攷 P・三七八
- 29) 小野武夫 (一九三五) 日本近世饑饉志 P・三二
- 30) 森 嘉兵衛・谷川健一 (一九七〇) 日本庶民生活史料集成 七 P・二七三
- 31) 山口弥一郎 (一九五三) 天明度に於ける津軽大秋の死絶と再興 社会経済史学 一九一四、五
- 32) 森 嘉兵衛・谷川健一 (一九七〇) 日本庶民生活史料集成 七 P・三八二・三八三
- 33) 新編青森県叢書刊行会 (一九七三) 新編青森県叢書 三 P・一五
- 34) 古事類苑刊行会 (一九二八) 古事類苑 天部歳時部 P・一四六三
- 35) 森 嘉兵衛・谷川健一 (一九七〇) 日本庶民生活史料集成
- 36) 竹内利美・森嘉兵衛・宮本常一 (一九六九) 日本庶民生活史料集成 三 P・二一
- 37) 青森県八戸市対泉院 (一九七五・三・一〇・訪問) 青森県八戸市大慈寺住職談
- 38) 新編青森県叢書刊行会 (一九七三) 新編青森県叢書 三 P・二六八
- 39) 小野武夫 (一九三五) 日本近世饑饉志 P・一八三
- 門前弘多 (一九四四) 古今凶作飢饉誌 P・一六一
- 小鹿島 果 (一九六七) 日本災異志 P・六一
- 森 嘉兵衛・谷川健一 (一九七〇) 日本庶民生活史料集成 七 P・二七九
- 40) 森 嘉兵衛・谷川健一 (一九七〇) 日本庶民生活史料集成 七 P・三四三
- 41) 森 嘉兵衛・谷川健一 (一九七〇) 日本庶民生活史料集成 七 P・五一九
- 高橋梵仙 (一九六八) 田中千代松教授古稀記念論文集 経済論集一一 P・一二七
- 42) 森 嘉兵衛・谷川健一 (一九七〇) 日本庶民生活史料集成 七 P・四二五

- 43) 下中弥三郎 (一九五五) 世界歴史辞典 二二 P・四〇二
- 44) 小野武夫 (一九三五) 日本近世饑饉志 P・三四
- 45) 新編青森県叢書刊行会 (一九七三) 新編青森県叢書 三 P・九三
- 46) 新編青森県叢書刊行会 (一九七三) 新編青森県叢書 三 P・二七七
- 47) 青森県 (一九二六) 青森県史 四 P・九一四
- 48) 青森県 (一九二六) 青森県史 四 P・九一八
- 49) 古事類苑刊行会 (一九二八) 古事類苑 天部歳時部 P・一四四七
- 50) 竹内利美・森嘉兵衛・宮本常一 (一九六九) 日本庶民生活史 料集成 三 P・二九
- 51) 竹内利美・森嘉兵衛・宮本常一 (一九六九) 日本庶民生活史 料集成 三 P・一七七・一七九
- 52) 高橋梵仙 (一九六二) 日本人口史之研究 三 P・一三六
- 53) 小鹿島 果 (一九六七) 日本災異志 P・一七
- 54) 一九七五年四月一日 (於京大・歴史地理学大会) 筆者発表・筑波大千集徳爾氏評
- 55) 浅井得一 (一九七五) たべものの地理 P・一六
- 56) 竹内利美・森嘉兵衛・宮本常一 (一九六九) 日本庶民生活史 料集成 三・P・一六五・一八九
- 57) 長福寺 岩手県久慈市裏町 (一九七四・七・三一・訪問)
- 58) 長善寺 岩手県神貫郡石鳥谷町 (一九七四・八・一一・訪問)
- 59) □□寺 須田圭三 (一九七三) 飛田○寺院過去帳の研究
- 60) 対泉院 青森県八戸市新井田 (一九七五・三・一〇・訪問)
- 61) 松庵寺 岩手県花巻市双葉町 (一九七四・八・五・訪問)
- 62) 滝本誠一 (一九二九) 日本経済大典 二六 P・五三五
- 63) 森嘉兵衛・谷川健一 (一九七〇) 日本庶民生活史料集成 七 P・六七三
- 64) 盛岡市史編集委員会 (一九六八) 盛岡市史 三〇二 P・四三八 大泉寺過去帳による死亡者も同様の状態を示している。
- 65) 森 嘉兵衛 (一九三二) 旧南部藩における天明の飢饉 社会経済史学 二一
- 66) 森 嘉兵衛 (一九五三) 岩手を作る人々 下 P・八〇
- 67) 新編青森県叢書刊行会 (一九七三) 新編青森県叢書 三 P・三二四
- 68) 岩手県二戸郡一戸町 実相寺過去帳
- 69) 岩手県九慈市裏町 長福寺過去帳
- 70) 関山直太郎 (一九六九) 近世日本の人口構造 P・一六〇
- 山政子 (一九七〇) 疾病と地域・季節 P・一四九

The purpose of this study is to make clear the characteristics of Tenmei's famine disaster in North Eastern Japan. The writer compared Tenmei's disaster with Tenpo's which also happend in the late Tokugawa Era. As a result the writer can indicate the following points. On Tenpo's famine disaster:

- (1) We can find out a suffered district resembling to Dfa region of climatic pattern of Köppen.
- (2) The disaster was nation-wide and extended over a long period of time showing some peaks from 3rd year of Tenpo to 10th.

Meanwhile, on Tenmei's famine disaster:

- (1) This disaster can apparently be divided into two regions, West side(West Tohoku) and East side, by mountain ranges. Especially in the Pacific Ocean side of Tohoku district it was very severe.
- (2) It occured in a short-term, but some of the peaks were extremely high and pointed.
- (3) As for the number of the dead persons per month in the Aomori prefecture, Hachinohe(on the Pacific Ocean) shows especially the high peak more than any other district.

## 第一八回大会発表要旨・所見

駅家・駅路跡復元への一試考

(要旨)

長谷正紀

古代駅家・駅路の復元は、諸先学により究明され、歴史地理学紀要(十六集)『交通の歴史地理』にも、近来の成果が示されている。今回の発表は、上記先学の研究に導かれながら(一)紀伊国においては史料に名を残す駅路の部分的復元への一試論と、(二)駅家跡復元に関連しての伝馬の記載について疑問点を提示してみたい。

(一) 紀伊国は『延喜式』に「駅馬、荻原。賀太。」とあり、荻原駅はかつらぎ町荻原、賀太駅は和歌山市加太に比定されている。両駅を結ぶ駅路を示す史料として『平安遺文』(七九)の記事があげられる。

紀伊国那賀郡司解

野田十町四至 東至道平田曆家垣 川原賀都伎池 西至山路  
南至駅路 北至紀朝臣真公栗栖

黒谷池山十町

林切八段<sup>(木ケ)</sup>牙本四至 東至山路 西至駅路  
南至丈部氏真同姓木道纒曆地 北至山路

承知十二年(八四五)

本史料に名を残す「駅路」を那賀郡山崎郷内に求めると、現和歌山市中筋日延地区に小字「野座」があり、四至の東を示す「川原」なる地字が存在する。同時に黒谷池も「野座」の北方雄山峠沿いに残存し、駅路は「野座」の南方に推定されようが林切については不明である。本試論は史料に名を残す「駅路」を地籍図等で復元し、古代駅路を追求した次第である。